
「インキュベイト」「共存・交流」「成長・拡がり」の3つのプロセスで
キャンパス・コミュニティーを形成し、学生期に必要な自律的成長を促す試み



「大学コミュニティーの創造」プロジェクト

同志社大学

「インキュベイト」「共存・交流」「成長・拡がり」の3つのプロセスで
キャンパス・コミュニティーを形成し、学生期に必要な自律的成長を促す試み

「大学コミュニティーの創造」プロジェクト

大学の基礎情報

- 1: 大学の創始者、生い立ち
- 2: 同志社大学の規模
- 3: 現在の同志社大学

本学の取り組み

- 1: 本プロジェクトの概要
 - ・プロジェクト全体像
 - ・社会背景を踏まえた動機
 - ・全学横断的な支援体制の構築

実施プロセス

- 1: 学生支援センターの啓発支援活動
 - ・何でも相談
 - ・エンパワーメントプログラム
 - ・コミュニティービルディング
 - ・メディア活用
- 2: 学生部の障がい学生支援
- 3: 国際センターの異文化交流

取り組みの特色について

- 1: 学生のニーズと課題に焦点をあてた施策
- 2: 成長のスパイラルモデルで再編成
- 3: 障がい学生支援と大学コミュニティー創造

取り組みの有効性について

- 1: 利用者拡大とS-cube効果
- 2: プログラム前後で効果を確認

将来展望

- 1: トータルクオリティマネジメント
 - ・成果評価の実践
 - ・次世代アセスメント開発
- 2: 教育開発センターの設置
 - ・高等教育機関としての役割

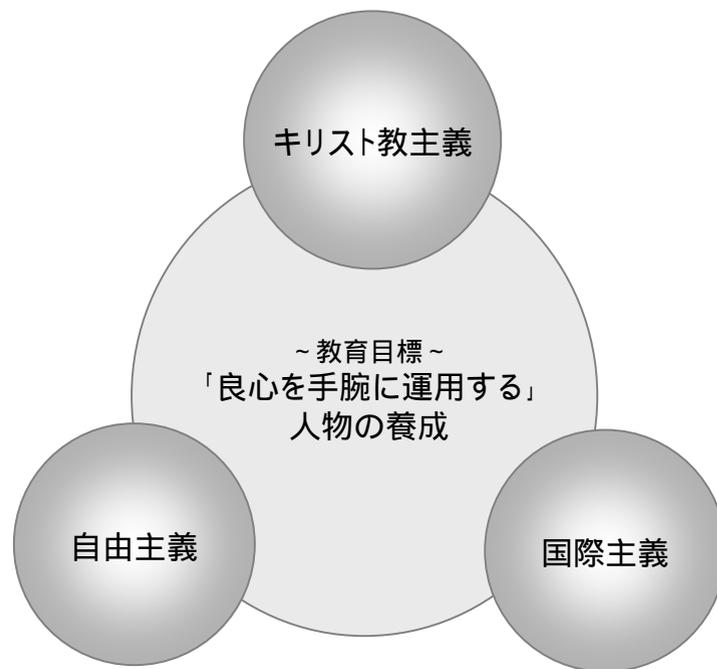
終わりに

- 1: 本プロジェクトの概要(まとめ)



1:大学の創始者、生い立ち

同志社大学は、1875(明治8)年に新島襄によって、その前身となる同志社英学校が設立されたことに始まる。新島襄は江戸時代末期に国禁を犯してアメリカに渡り、帰国した後、異国の地で得た様々な経験と、そこで培った教育の理念を拠り所にキリスト教主義を徳育の基本とする大学の設立を目指した。以来、同志社大学は「キリスト教主義」「自由主義」「国際主義」の三つの教育理念を掲げ、「良心を手腕に運用する」人物の育成を教育の目標とし、多くの人材を世に送り出してきた。



3つの教育理念と人材輩出

2: 同志社大学の規模

教学組織は6学部、8研究科で構成(2003年5月現在)されており、学生総数24,166名、専任教員482名(助手、実験講師含む)である。1986年には京都府南部の田辺町(現・京田辺市)に田辺(現・京田辺)キャンパスを開校し、現在は文学部の1.2年次生と工学部および工学研究科の学生13,125名が学び、文系3.4年次生および文学研究科の学生11,041名が今出川キャンパスで学んでいる。

2004年4月には、政策学部と、工学部に新たな2学科を、さらに専門職大学院としてビジネス研究科と司法研究科を開設した。

教学組織	6学部8研究科(2003年5月現在)
学生数	24,166名
専任教員数	482名(助手・実験講師等含む)
2つのキャンパス	京田辺キャンパス 今出川キャンパス
新設学部・学科	2004年4月政策学部、工学部2学科新設 専門職大学院(ビジネス研究科・司法研究科)

3: 現在の同志社大学

本学は、校祖新島の「学生を鄭重に扱うべし」との遺訓に従い、学生個々人の自治自立を尊重し、教員と学生の人格的交わりを通じて、学生一人ひとりの学びのニーズに応えようと努めてきた。設置科目は多種多様で、外国語科目と保健体育科目を含め約6,800科目(2003年度)になり、学部・学科を超えた自由な科目履修が可能となっている。

また、教育理念である「国際主義」を实践する形として、世界20カ国54大学と提携し多様な留学プログラムを展開している。研究面では、時代の要請に応え、先端的な世界最高水準の応用研究を行なうため、2003年4月に研究開発推進機構と8つの研究センターを開設した。



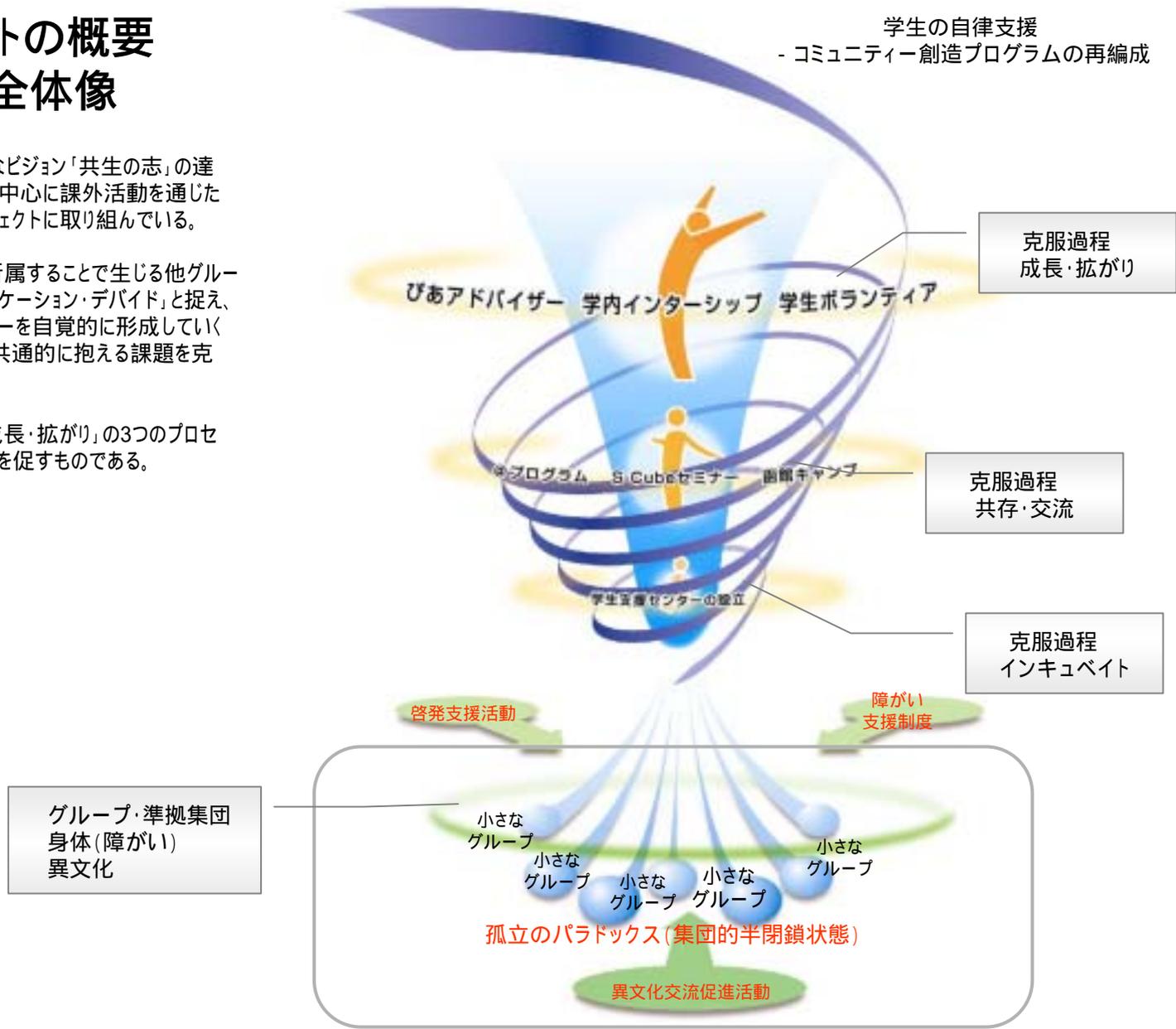
1: 本プロジェクトの概要 ・プロジェクト全体像

創立125周年を機に定めた新たなビジョン「共生の志」の達成を目指し、学生支援センターを中心に課外活動を通じた「大学コミュニティの創造」プロジェクトに取り組んでいる。

その狙いは、人があるグループに所属することで生じる他グループとの接触機会の減少を「コミュニケーション・デバインド」と捉え、キャンパスというひとつのコミュニティを自覚的に形成していく行為を通じて、現在の大学生が共通的に抱える課題を克服させていくことにある。

「インキュベート」「共存・交流」「成長・拡がり」の3つのプロセスで、学生に必要な自律的成長を促すものである。

学生の自律支援
- コミュニティ創造プログラムの再編成



1: 本プロジェクトの概要

・社会背景を踏まえた動機

大学生を取り巻く現状の大きな変化

国際化、情報化 個人の孤立 無関心、
不寛容

同志社での深刻な学生の
自治意識の低下

実社会で必要不可欠な
「能力養成の場」とも言える
自主的活動が希薄化

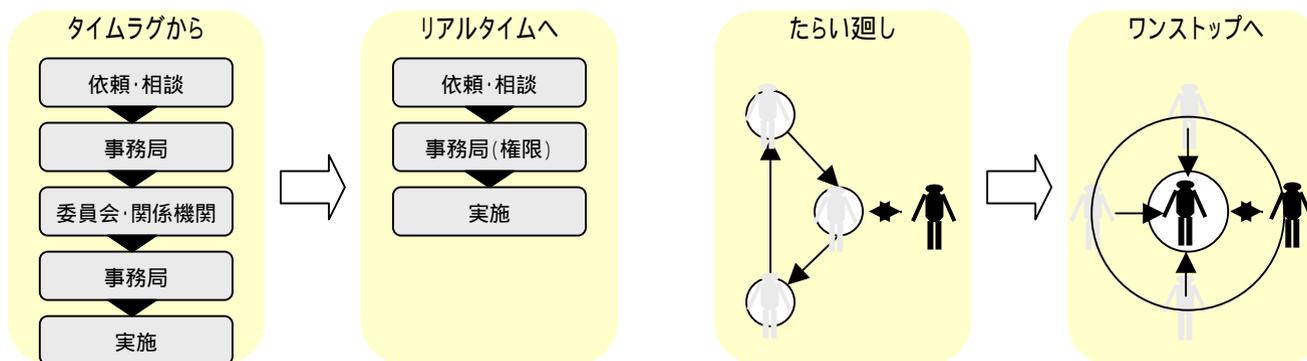
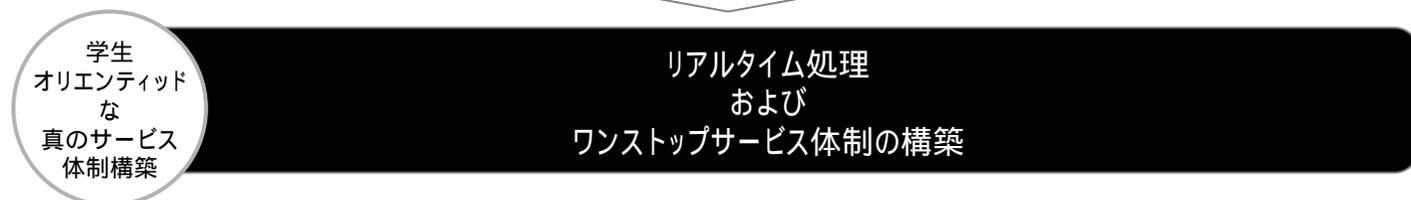
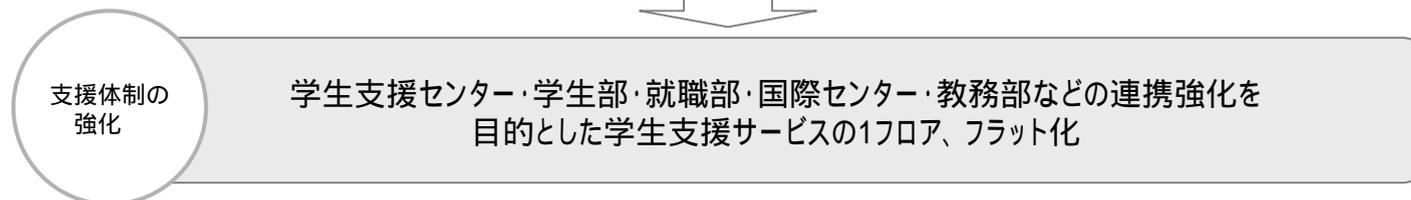
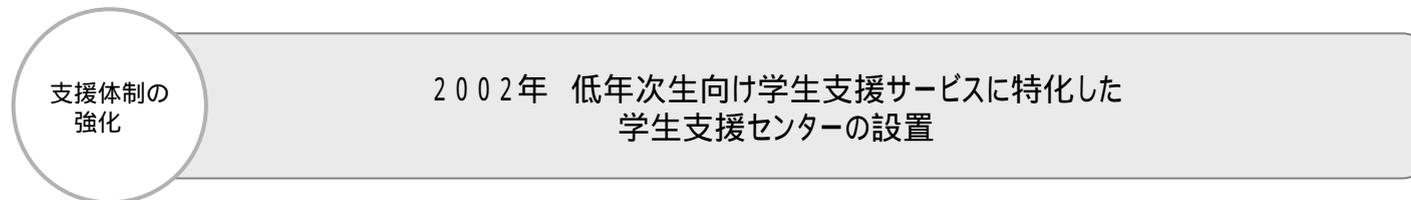
縦横いずれの人間関係も希薄化し、他者との
触れ合いや葛藤を通じた精神的な成熟
が大変困難な状況が生じる。

能力養成の場の提供の必要性増大

大学というコミュニティーを
意識的に形成する諸活動を
支援することによって
学生の成長に「インセンティブ」を与える
多様なプログラム開発の必要性が増大

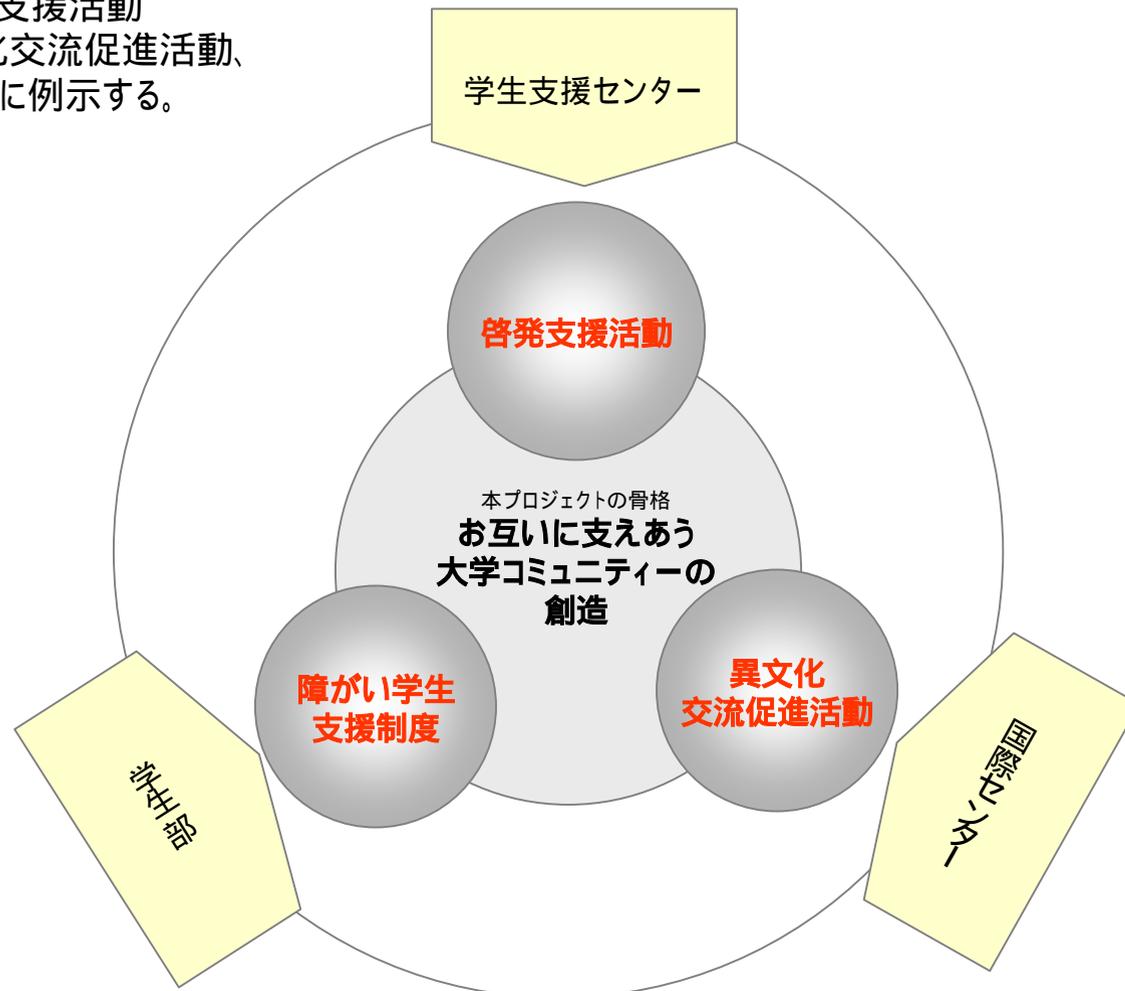
1: 本プロジェクトの概要

・全学横断的な支援体制の構築



1: 学生支援センターの啓発支援活動

本プロジェクトの骨格を成す、
・学生支援センターの啓発支援活動、
・学生部の障がい学生支援活動
・国際センターの異文化交流促進活動、
という3つの取組を以下に例示する。

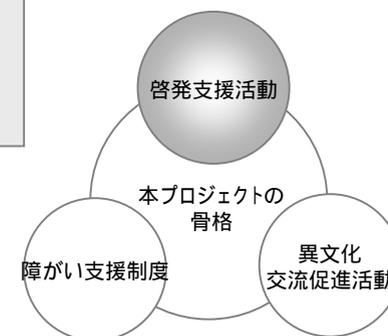


1: 学生支援センターの啓発支援活動

・何でも相談

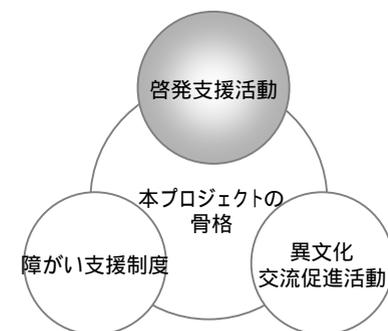
Face To Faceの信頼関係の構築を目指した施策

<p>何でも相談窓口</p>	<p>学生個人の個性とニーズを捕捉し 学生個々の特性に合わせたオーダーメイドの支援策を提供。</p>	
<p>S-cubeカード</p>	<p>カード作成を通じて学生個人が自らの個性とニーズを認識し、さらに個別面談などにも活用。</p>	
<p>外部プログラムデータベース</p>	<p>公募プログラムやボランティアなどの学外情報を「外部プログラム」として一元管理し、個々のニーズに合わせて情報を提供。</p>	



1: 学生支援センターの啓発支援活動 ・エンパワメントプログラム 1/2

学生に体力的・精神的な限界を自ら体験させることによって
個々人の持つ潜在能力を引き出し、さらなる主体性を引き出そうとする試み

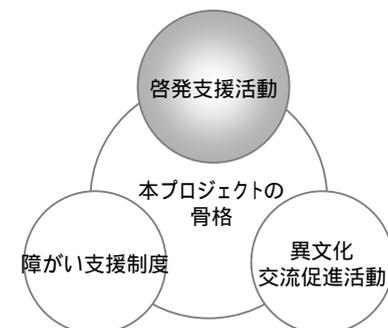


1: 学生支援センターの啓発支援活動

・エンパワーメントプログラム 2/2

Face To Faceの信頼関係の構築を目指した施策

<p>エンパワーメント S-cubeセミナー</p>	<p>学生のニーズを敏感に捉え、リアルタイムでイベントに転化する試み</p>	
<p>エンパワーメント エンパワーメント プログラム</p>	<p>自ら体力的・精神的に限界を体験する機会の提供による個々人の持つ潜在能力を引き出し、主体性を見出せる試み</p>	



1: 学生支援センターの啓発支援活動 ・コミュニティー形成

Face To Faceの信頼関係の構築を目指した施策

達成感共有の機会

ファーストイヤー
キャンプ

スポーツ
フェスティバル

ルーツの
確認

函館キャンプ

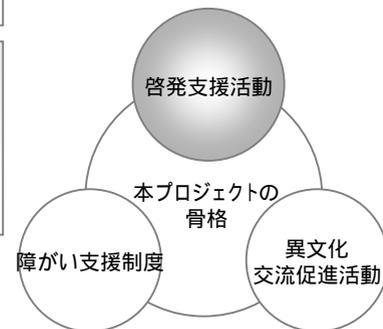
他者支援

ぴあアドバイザー
ぴあメンター

主体性を発揮しはじめた学生には
構想-実施-成果という一連のプロセス
を体験させ達成感を共有する機会を
提供。

校祖脱国の地での共同生活を通じて
学生・教職員がお互いの人間性に触れ
本学のルーツに繋がるアイデンティ
ティを確認する機会を提供。

数々の成長を遂げた学生が、次年度
生を含む他者のために主体的に行動し、
そのスピリットを拡げていく仕組み
として構築した成長支援制度。



1: 学生支援センターの啓発支援活動 ・メディア活用

Face To Faceの信頼関係の構築を目指した施策

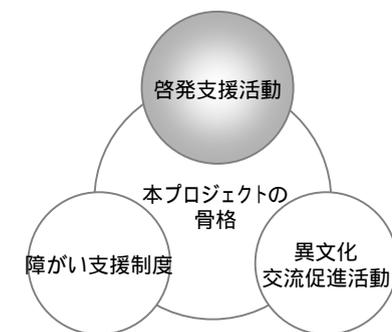
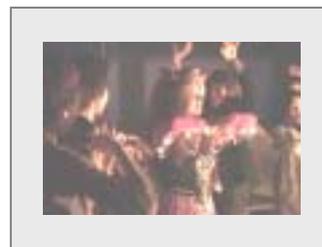
S-cubeNet
(年9回発行・約5,000部配布)

京田辺キャンパスの低年次生向けの自己啓発に特化した情報紙。年9回センターで企画編集発行。センターの活動紹介を最少のタイムラグで学生へ広報し、活動に込めたセンターのメッセージをダイレクトに伝達している。



**動画ビデオ
ストリーミング配信**

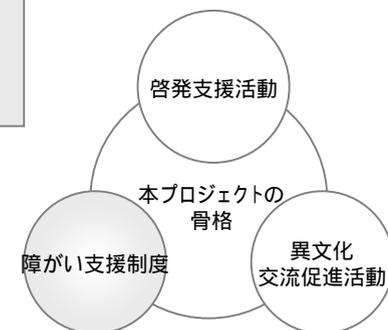
同志社大学WEBサイト上で、企画情宣や学生個々へのメール配信を実施。またストリーミングサーバーを活用し、各種プログラム紹介を動画ビデオで配信している。



2: 学生部の「障がい学生支援制度」

Face To Faceの信頼関係の構築を目指した施策

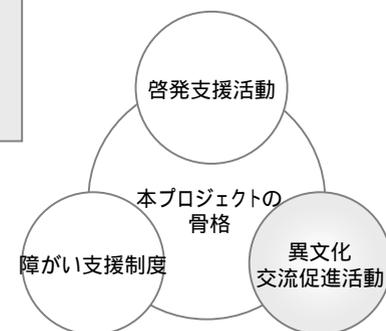
<p>ノーマライゼーション 委員会による 「障がい学生支援制度」</p>	<p>2001年、介助犬を必要とする学生の受け入れを機会に制度化。</p>	
<p>常勤の点訳者・手話通訳者 ノートテイク・パソコン通訳、 点訳などの講習会実施</p>	<p>専門スタッフの常勤を実現化。 障がい学生の支援スキル習得を目的にアシスタントスタッフやボランティアスタッフを養成。</p>	
<p>障がい学生、支援学生、大学の三者の定期的な懇談会の実施</p>	<p>当事者である障がい学生、支援学生、大学の三者で定期的な懇談会を行い、最も必要なサポート体制・制度の改善を行なっている。</p>	



3: 国際センターの異文化交流促進活動

Face To Faceの信頼関係の構築を目指した施策

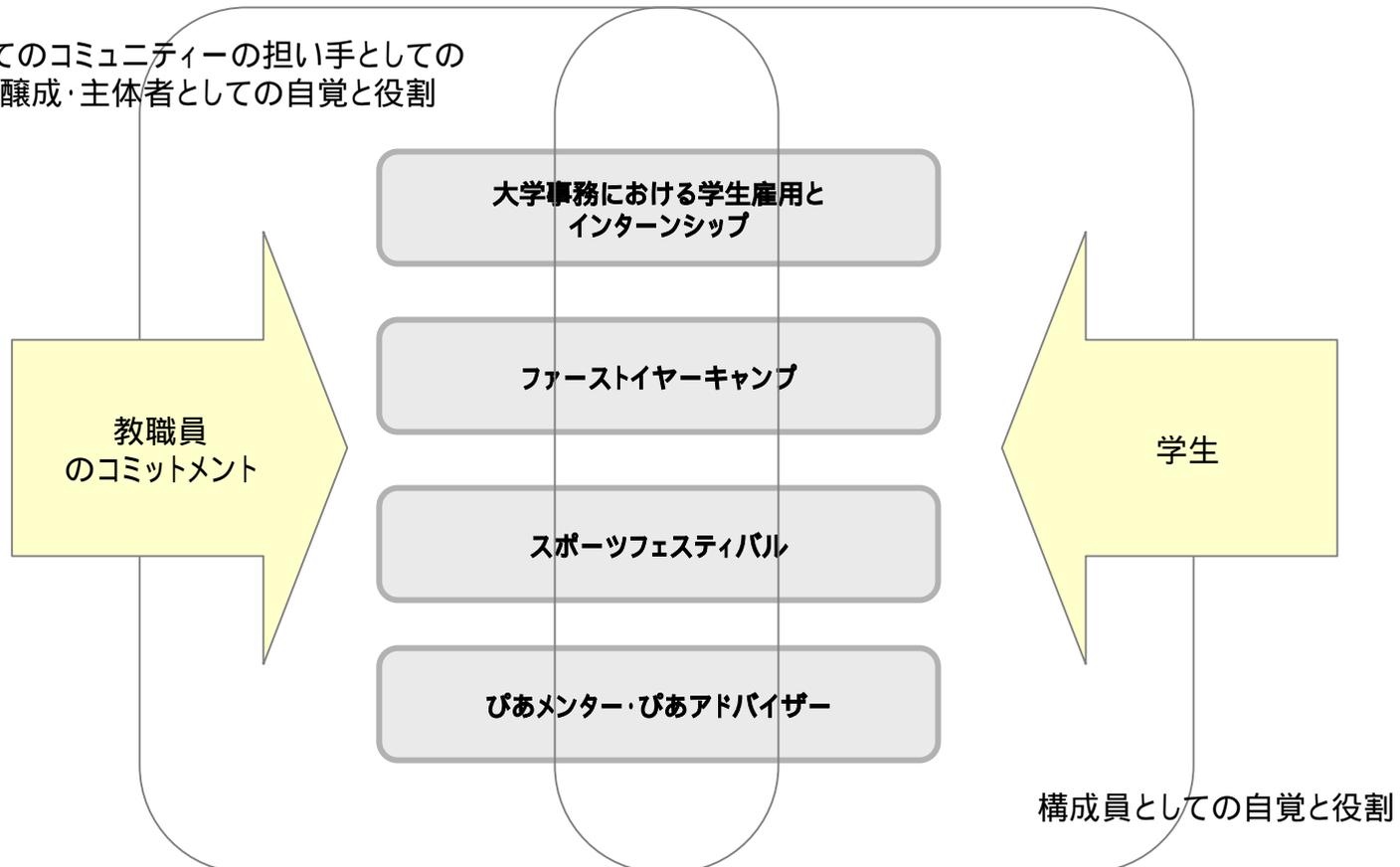
<p>国際交流合宿</p>	<p>入学早々の留学生を対象とした国際交流合宿には邦人学生も参加させ、ネットワーク作りと邦人学生の異文化体験の場。</p>	
<p>ボランティア</p>	<p>・出迎え、生活ボランティア ・留学生ボランティア ・国際ボランティア など人的支援を核とした留学生のケア。</p>	
<p>留学生委員会</p>	<p>・留学生ぴあアドバイザー ・留学生交流会 による邦人学生との密な交流促進を支援。</p>	



4: 教職員・学生の主体的関与

従来、教員や職員が担当すると考えられてきた業務に、学生を関わらせる取組を行なっている。学内の事務等における「学生雇用」は就学支援として有効であるだけでなく、社会性・責任感の涵養・帰属意識とコミュニティーとしての大学運営への関心を高める効果がある。また、教職員自身にもコミュニティーの担い手としての参加意識の醸成・主体者としての自覚と役割認識を求めている。

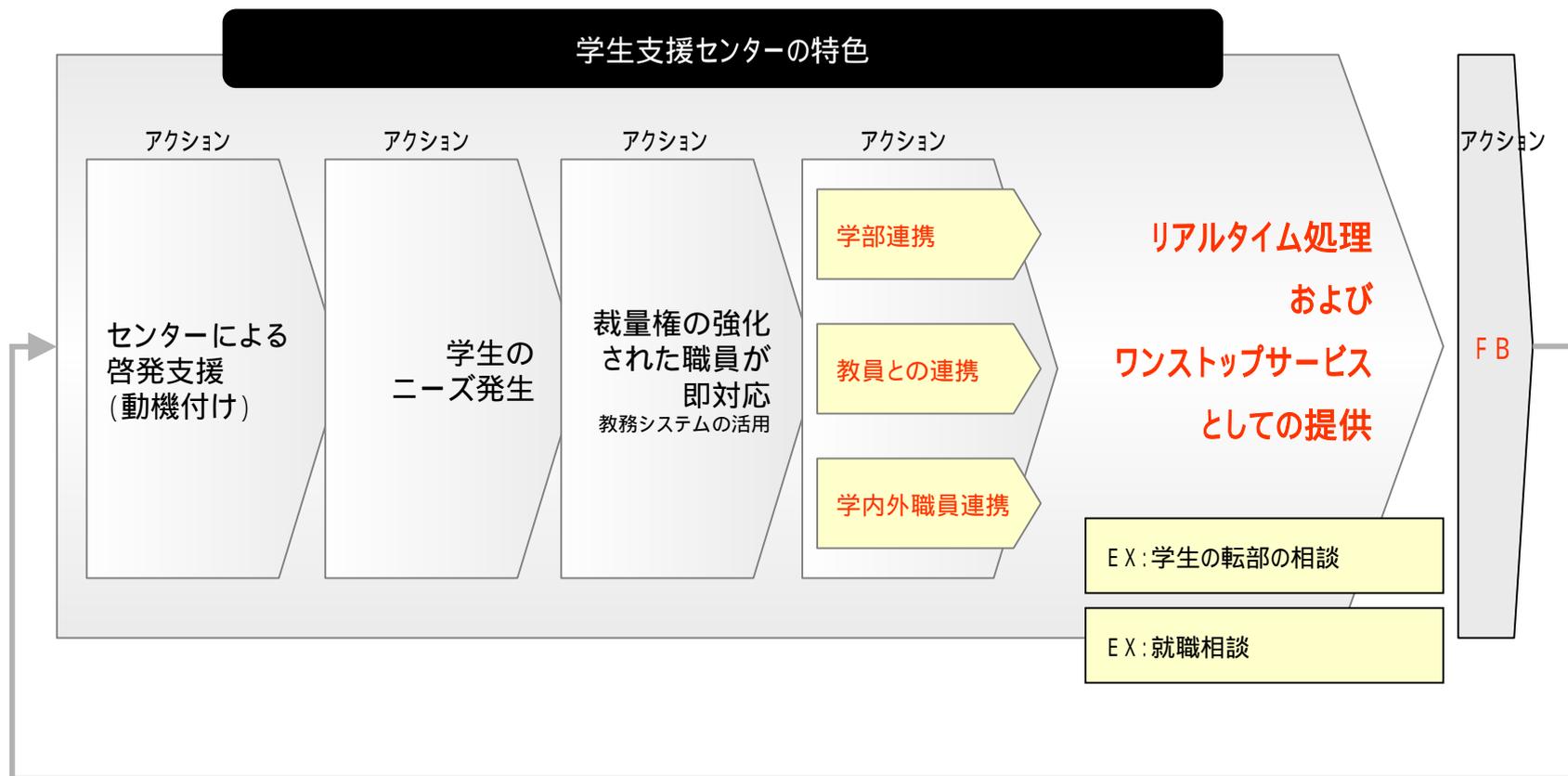
教職員としてのコミュニティーの担い手としての参加意識の醸成・主体者としての自覚と役割



1: 学生のニーズと課題に焦点をあてた施策

より機動的に学生のニーズによって動く新しいタイプの支援センターづくり

～ 課題を鋭敏に捉え、その課題に焦点を当てた施策を即座におこなう機能～



2: 成長のスパイラルモデルでプログラムを再編成 コミュニケーション・デバイドの認識

個人が特定のグループに所属することで安定した人間関係が得られる半面、そのグループ以外の人々とのコミュニケーション機会が減少し、分離する状態を言い表した造語。その傾向は個の確立が不十分なほど高く、その結果、学生は学内に用意された豊富なりソースに触れるチャンスを逸し、人生を考える機会が減少する。

～ 3つのコミュニケーション・デバイド～

コミュニケーション・デバイド
グループ、準拠集団によるもの

入学時に個の確立が充分になされていず、学生が孤立化する傾向がある。
友人関係の希薄化、学部や学年を超えて豊かな人間関係を築いていく機会の減少。

コミュニケーション・デバイド
身体(障がい)によるもの

身体的な障がいを持つ学生と健常者との間に生まれる心理的、物理的な垣根。

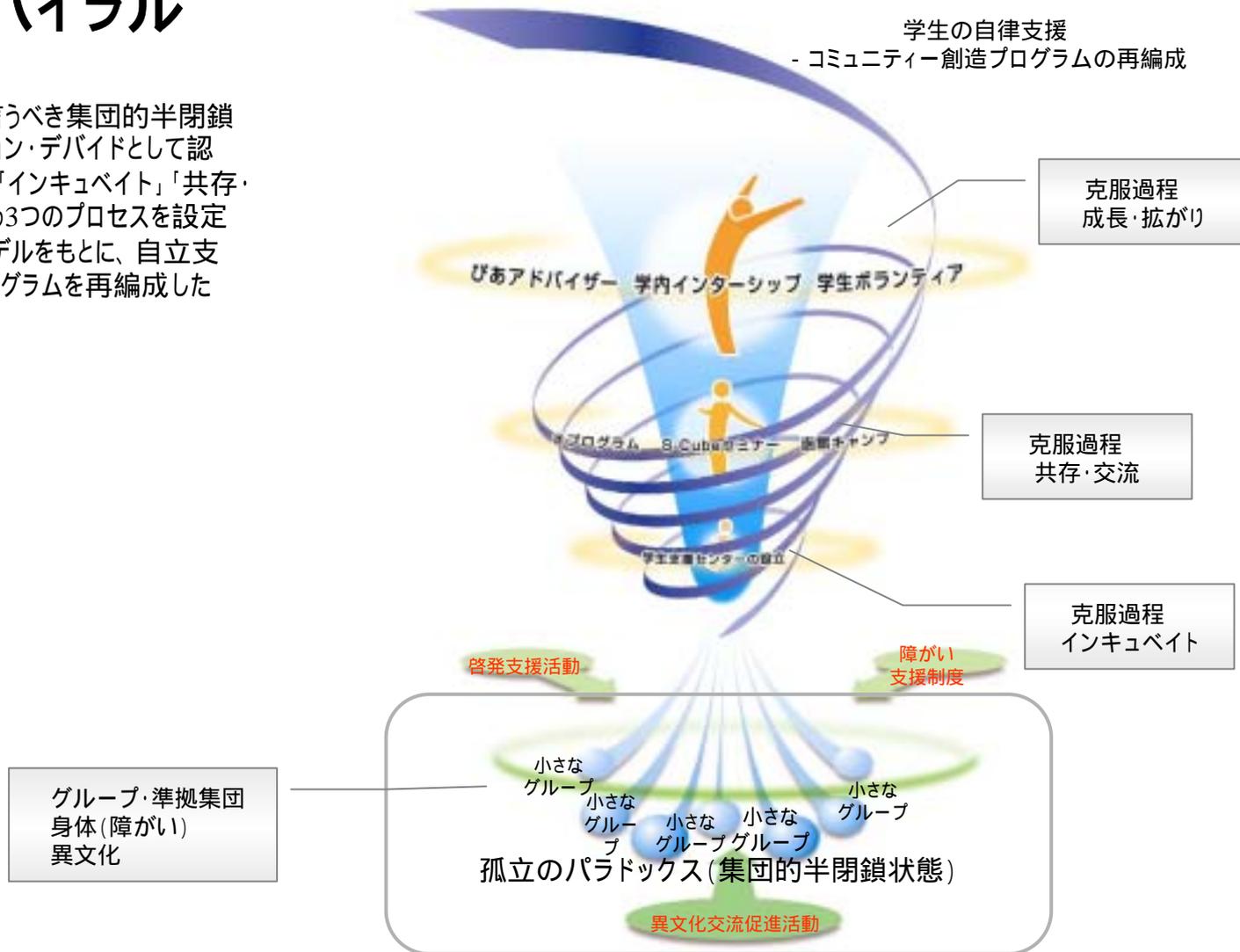
コミュニケーション・デバイド
異文化によるもの

文化の違いによるコンフリクト。
多くは留学生と邦人学生との間に起こり、国を超えた豊かな人間関係を築く阻害要因。

準拠集団 = 個人の行動は、個人の価値観や信念などによって決定されるだけでなく、個人がなんらかの関係を持つさまざまな社会集団の影響を受ける。こうした個人の行動に影響を与える集団を指す。

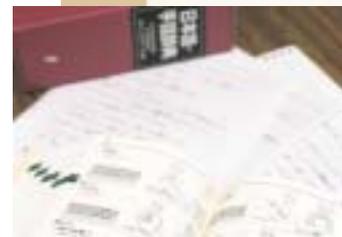
2: 成長のスパイラルモデルでプログラムを再編成 成長のスパイラル

「孤立のパラドックス」とも言うべき集団的半閉鎖状況を3つのコミュニケーション・デバインドとして認識し、その克服過程として「インキュベイト」「共存・交流」「成長・拡がり」という3つのプロセスを設定した「成長のスパイラル」モデルをもとに、自立支援 - コミュニティー創造プログラムを再編成した点にも大きな特色がある。

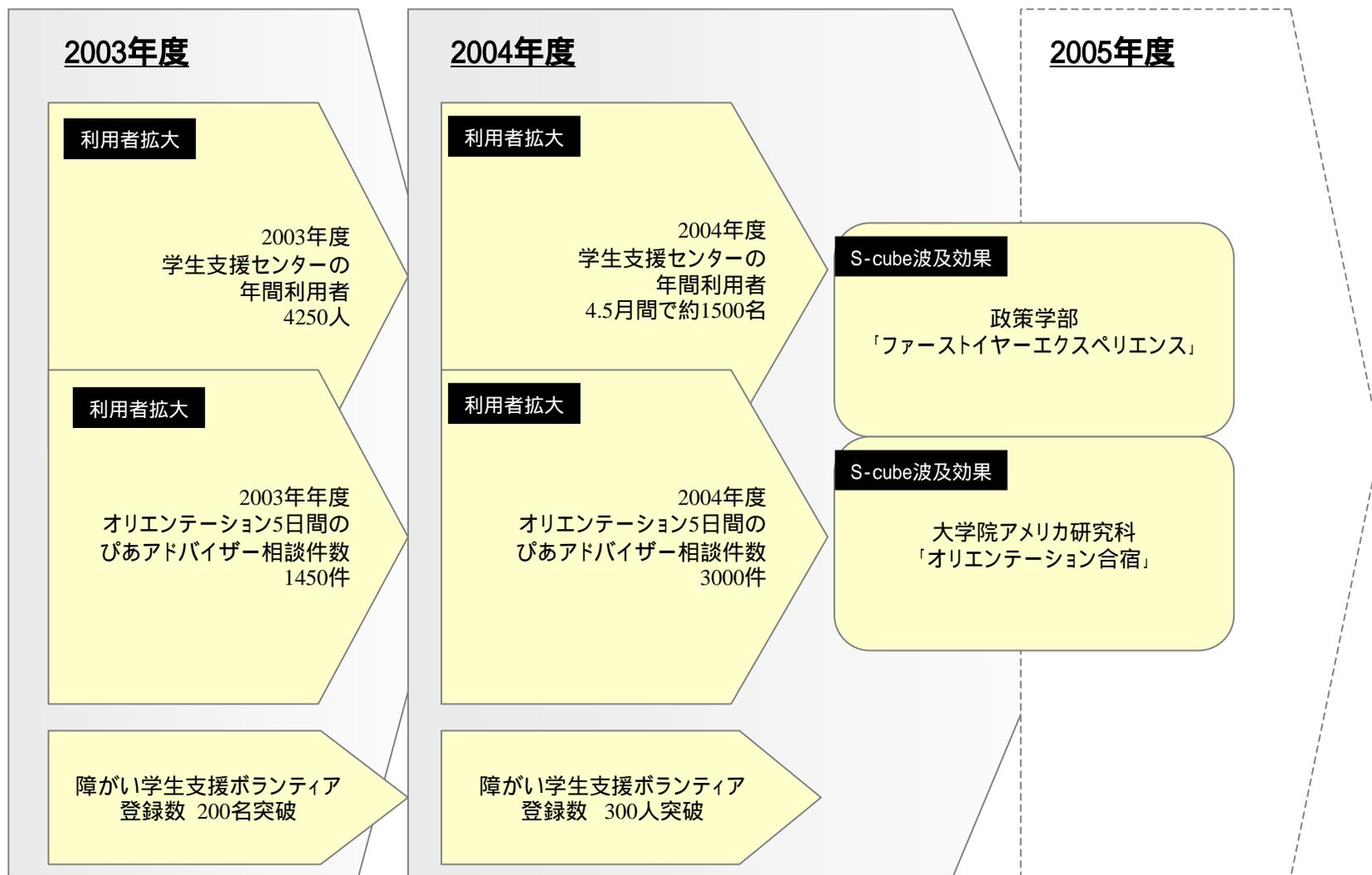


3: 障がい学生支援と大学コミュニティ創造

本取り組みのうち、「障がい学生支援」に関しては、2004年度版「大学ランキング」(朝日新聞社)で総合5位評価ながらも、「支援」の部門では1位評価を得ている。このことは、本学の支援のあり方が、障がい学生にのみ焦点をあてたものでなく、健常学生に対する働きかけを通じて多くのサポーターを育成し、質の高い人的支援を可能にする、障がい学生に優しいコミュニティ - の創造につながっている。



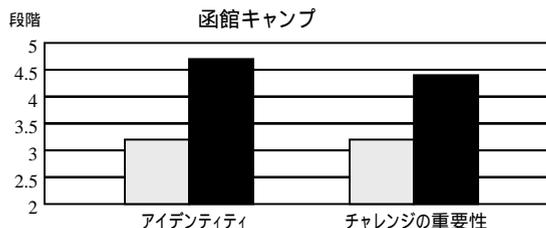
1: 利用者拡大とS-cube波及効果



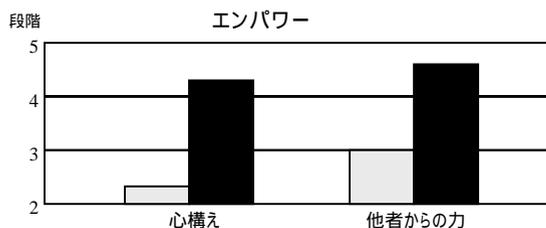
2: プログラム前後で効果を確認

□ = プログラム参加前
 ■ = プログラム参加後

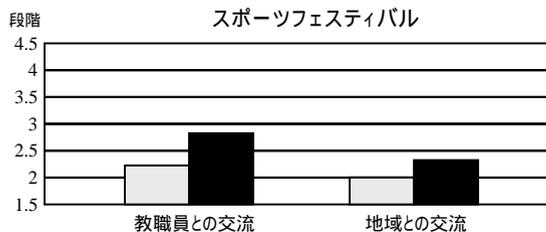
函館キャンプにおける参加者評価
 ・同志社大学生としての帰属意識
 ・人と協力して課題に挑戦するから



エンパワーメントプログラム
 ・心構えの大切さ
 ・他者から受ける力付け



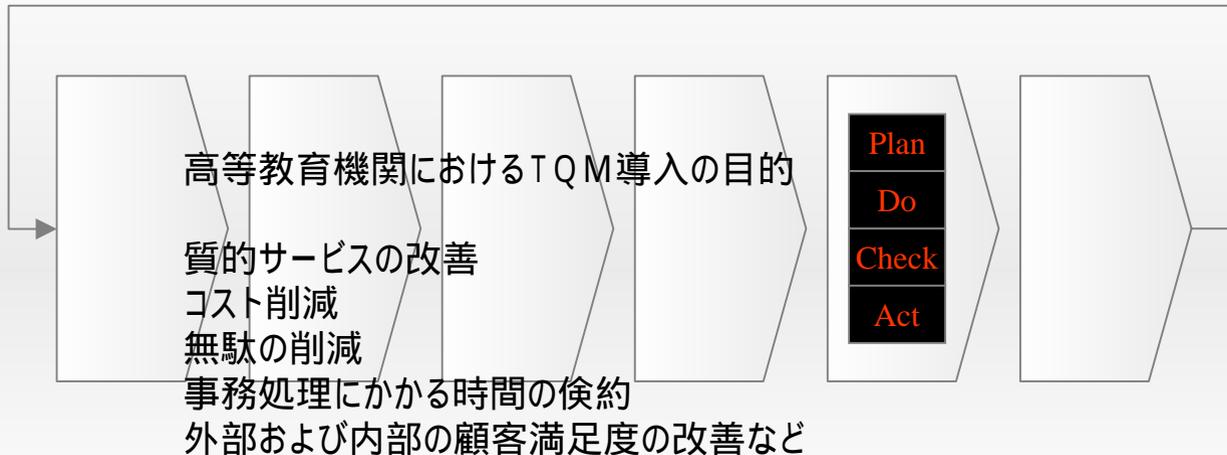
**スポ - ツフェスティバルの
 実行委員の自己評価 (4段階)**
 ・教職員との交流
 ・地域との交流



1: トータルクオリティマネジメントによる評価と改善 ・成果評価の実践

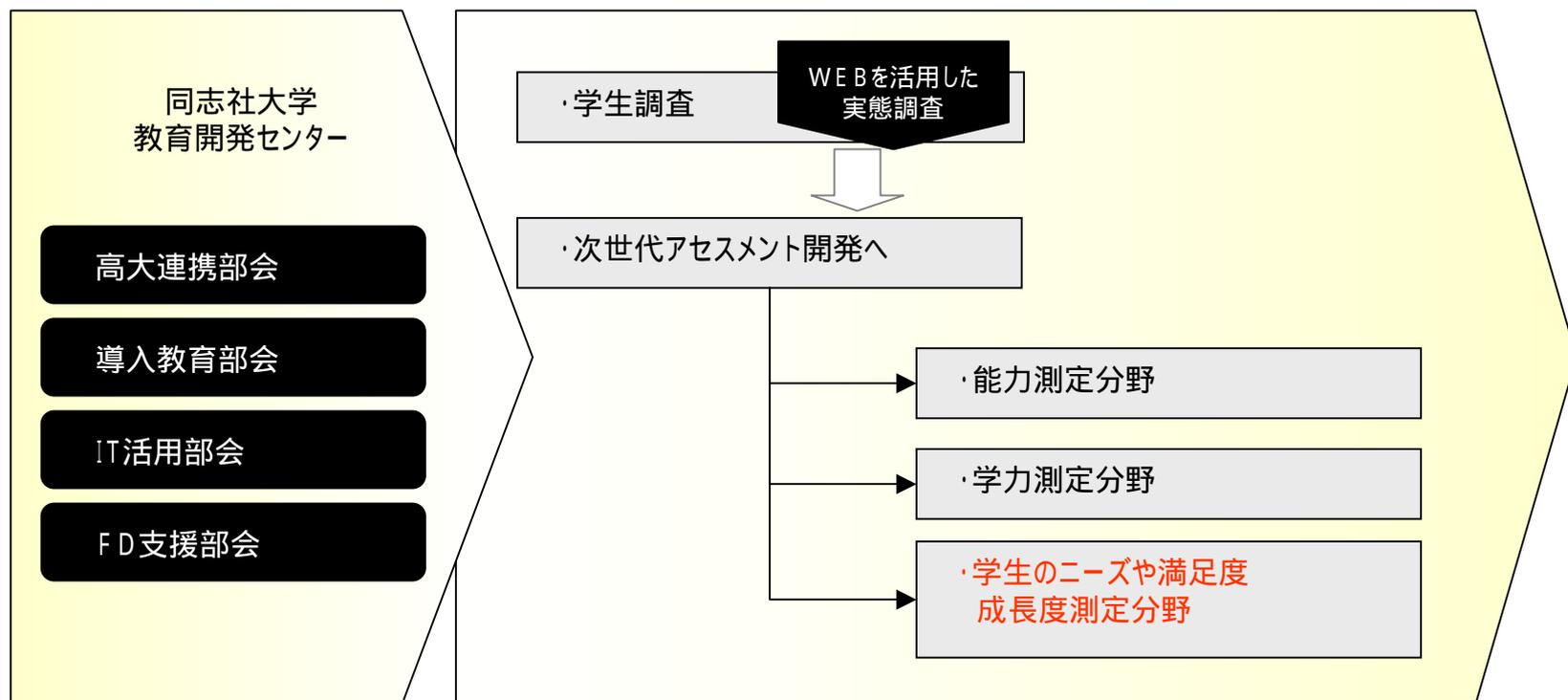
事業評価としてのプロセス評価だけでなく、本取組に「質」と「卓越性」を確保するためにもアウトカム評価の導入を積極的に図らなければならない。

TQM (Total Quality Management)



2: 教育開発センターの設置 ・高等教育機関としての役割

本学は教育アセスメントの開発を今後の重要課題と位置付け、適切なアセスメントを継続的に実施し、学生の学習成果と満足度を不断に把握するため「教育開発センター」を2004年度設置した。



1: 本プロジェクトの概要(まとめ)

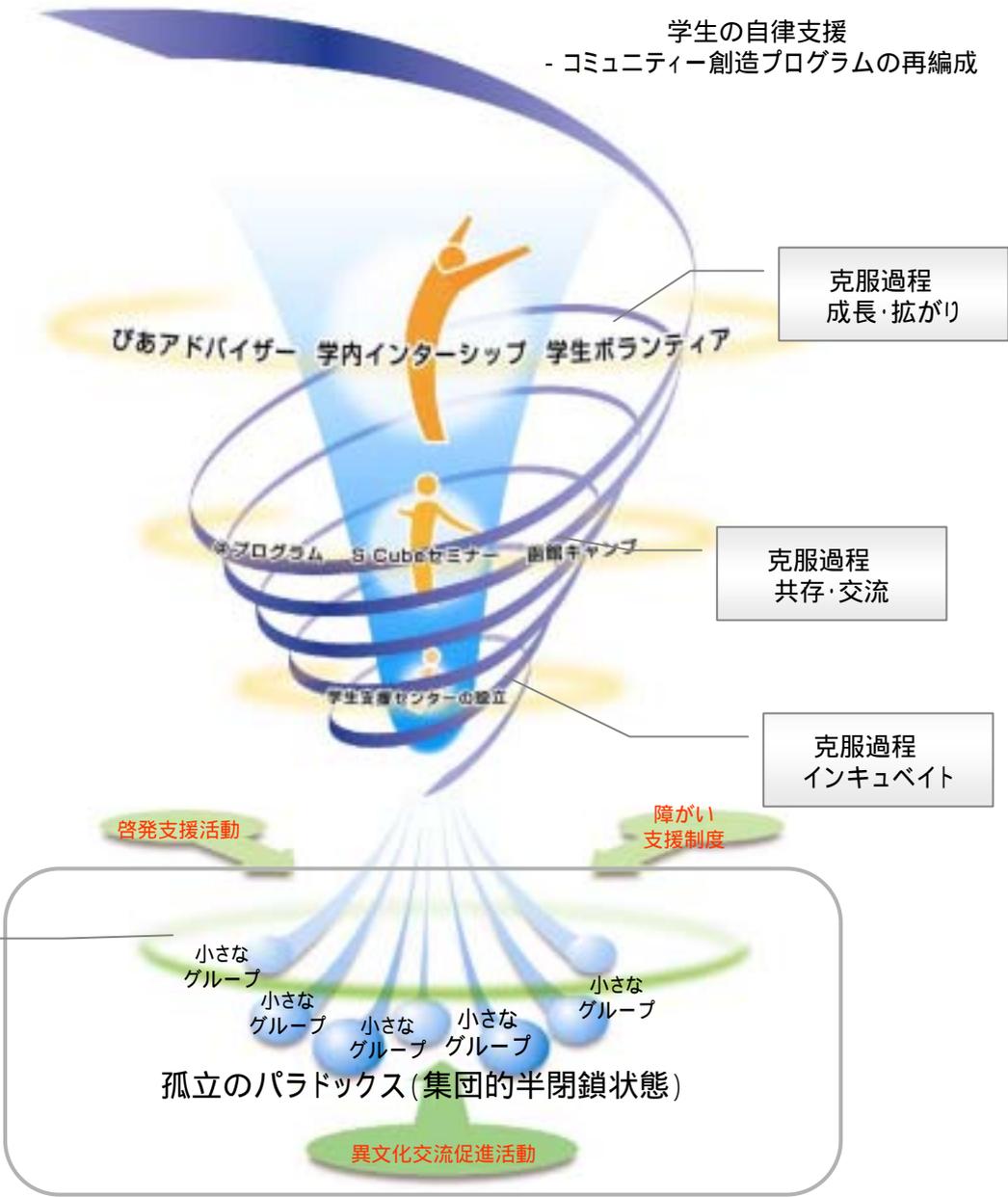
その狙いは、人があるグループに所属することで生じる他グループとの接触機会の減少を「コミュニケーション・デバイド」と捉え、キャンパスというひとつのコミュニティーを自覚的に形成していく行為を通じて、現在の大学生が共通的に抱える課題を克服させていくことにある。

「インキュベイト」
 「共存・交流」
 「成長・拡がり」

これら3つのプロセスで、学生に必要な自律的成長を促すものである。

学生の自律支援
 - コミュニティー創造プログラムの再編成

グループ・準拠集団
 身体(障がい)
 異文化



孤立のパラドックス(集団的半閉鎖状態)

異文化交流促進活動

啓発支援活動

障がい支援制度

克服過程
成長・拡がり

克服過程
共存・交流

克服過程
インキュベイト

びあアドバイザー 学内インターシップ 学生ボランティア

S-Cubeセミナー 図書館キャンパス

学生支援センターの設立

小さなグループ
 小さなグループ
 小さなグループ
 小さなグループ
 小さなグループ

2: 未来の姿

For God For Doshisha And Native Land

『同志社カレッジソング』の一節より

一国を維持するは、決して二三英雄の力に非ず、
実に一国を組織する教育あり、智識あり、品行ある人民の力に拠らざる可からず、
是等の人民ハ一国の良心とも謂ふ可き人々なり、
而して吾人ハ即ちこの一国の良心とも謂ふ可き人々を養成せんと欲す。

